

保育者養成課程における親子支援の実践と支援者教育

—赤ちゃんとの接触・育児経験に関する調査結果をもとに—

瀬々倉玉奈

(児童学科准教授・臨床心理士)

大江文子

(児童学専攻大学院生・幼稚園教諭・保育士)

要約

現代の家庭における育児環境の困難さを受けて、保育者養成課程においては、従来の幼児教育や保育に加えて、子ども・子育て支援の観点を持ち、支援実践が行える保育者の養成が急務になっている。

しかしながら、時代の申し子である学生達は、少子化の影響から乳幼児に接する機会が乏しく、幼い子どもに関わる際の不安や戸惑いを養育者と同様に感じていると考えられる。

本調査では、2つの大学における保育者養成課程の在对学生に対して、「赤ちゃんとの接触・育児経験に関する調査」を行い検討した。その結果、いずれの保育者養成課程の学生についても、赤ちゃんとの接触・育児経験は乏しいことが改めて確認された。

一方、上述した子育てに関わる状況、地域の要請と、大学教育におけるアクティブ・ラーニングの必要性とが相まって、大学における子ども・子育て支援活動が実施・検討されている。

そこで、子ども・子育て支援の観点を持ち、支援実践が行える保育者養成と、地域親子支援実践活動とを並行して行っている本学児童学科ならではの親子支援活動の展開について考察した。

未だ定型化されていない保育者養成課程における子ども・子育て支援の実践と学生の教育については、支援実践そのものはもちろんのこと、支援の場の環境構成、家具類、玩具類、絵本類などの選定の過程においても、学生の学びと共に進めていく必要があること、また、子ども・子育て支援活動とその支援者教育の維持と充実には、専用のスペースや専従スタッフなど、ハード面とソフト面との両面について充実化が必要であるとした。

1. 問題と目的

現代の子育ての困難な状態については、少子高齢化と合わせて論じられることが一般的である。特に、少子化については、合計特殊出生率の低迷により示されるが、1970年代半ば以降少子化現象が続いていることが問題視されている。この少子化現象の要因として、金子(2009)は、以下の3点を挙げている。年齢構造の変化、結婚の変容、夫婦出生行動の変化である。中でも、未婚・非婚化、晩婚化による結婚に関わる状況の変容は、当事者が、家族の範囲とみなす境界の定義であるファミリー・アイデンティティー(上野, 1991)すらも変化させるほど、大きな

影響をもたらしている。

この状況下で、家庭や地域の子育て力の低下が指摘されており、その背景としては、産業構造の変化による都市化や家族の小規模化、「通勤族」の増加等に加えて、根強い「3歳児神話」や「母性愛神話」への信望も指摘されている。

一方、子どもたちにとって、上記の状態は、時間・空間・仲間の三間の喪失ともいわれる状態をもたらしている。いまや、子どもたちは、保育所や幼稚園、学校以外の場所では、十分に遊べる環境を失ってしまったといっても過言ではない。

本来、子どもは、自然や人とのふれあいのなかで成長していき、仲間との遊びを通して人間関係の基礎を学び、生きる力を身につけていくはずである。子どもが安心し、仲間と夢中になって遊べる場を確保することが、社会に求められている。

このような状況下、保育所や幼稚園、学校という空間やその場での遊びや学びが、未だかつてないほどに重要な役割を果たすことになった。

中でも本稿では、特に、乳幼児期の教育・保育（ECEC：Early Childhood Education and Care）に関わる保育者養成課程に注目する。

原田（2006）は、10か月児健診時に、母親を対象とした育児に関する質問紙調査を実施している。大阪レポート（1980）、兵庫レポート（2003）と呼ばれる縦断的な調査結果を基に、現代女性の育児困難感、少女時代から成人女性へと成長し、子どもを生んで母親となる過程において、子どもに接する機会が乏しくなっていることが一因であると指摘している。なお、これは女性だけの問題にとどまらない。

それ故に、ECECにおいては、これまで以上に力量のある保育者が益々求められているとあってよい。

ところが、保育者養成課程に在学する学生自身が少子化社会の申し子であり、子どもに関わった経験が乏しい可能性が高いと考えられる。

そこで、本研究では、原田の調査の一部を参考に複数の学部所属の学生を対象として行った調査結果（瀬々倉、2015）のうち、保育者養成課程に在籍する学生のデータを抽出し、さらに、別の大学における保育者養成課程に在学する学生を対象として実施した同じ項目による調査結果を加えて、二つの女子大学の学生を対象とした調査結果を検討する。これにより、現代の女子大学生の赤ちゃんとの接触・育児経験の傾向を理解し、調査結果を基にして展開している本学児童学科の親子支援活動について考察を加える。

なお、本来、「乳児」とするべきであるが、本稿においては、実施した調査において使用し

た「赤ちゃん」という言葉を使用することとする。

2. 調査方法

これまでの赤ちゃんとの関わり経験について、質問紙調査を行った。

調査方法：複数の講義の初回において、調査の趣旨を説明し、質問紙を配布した後、その場で回答してもらい回収した。

調査期間：2013年度～2015年度の3年間

調査対象：ECECを主として学ぶ、保育者養成課程に在学する女子大学生。

その年齢と人数を示す（表1）。

表1. 調査対象の年齢

年齢	18	19	20	21	22	23	合計
A大学	170	141	78	23	8	0	420人
(%)	(40.5)	(33.6)	(18.6)	(5.5)	(1.9)	(0.0)	(100)
B大学	0	85	100	15	0	1	201人
(%)	(0.0)	(42.3)	(49.8)	(7.5)	(0.0)	(0.5)	(100)

3. 結果と考察

まず、択一形式で赤ちゃんに関する基礎知識の確認を行った。赤ちゃんの平均的な在胎期間を尋ねたものを表2に、平均的な出生時体重を尋ねたものを表3に示す。

表2. 在胎期間

月数	6月	8月	10月	12月	14月
A大学	0.2%	2.1%	87.6%	9.0%	1.0%
B大学	0.0%	3.5%	86.6%	8.0%	2.0%

表3. 出生時体重

体重	1 kg	2 kg	3 kg	4 kg	5 kg
A大学	0.0%	4.5%	94.5%	0.7%	0.2%
B大学	1.5%	2.0%	95.5%	1.0%	0.0%

出産に対する最低限の理解の程度を確認する質問項目として、平均的な在胎期間と出生時体重との質問の両方に正解した者は、A大学では83.3%、B大学では83.6%であり、両大学間で

の差は0.3%に過ぎなかった。

ここで、両方の質問に正答した者を【基礎知識有り】、いずれか一方でも誤答した者を【基礎知識無し】と定義して、赤ちゃんとの接触経験、育児経験について両大学の学生の回答結果を分析した。

(1) 赤ちゃんとの接触経験

赤ちゃんとの接触経験を尋ねる質問項目として、「赤ちゃんをさわったことがありますか」と尋ねた項目への回答を表4に、「赤ちゃんを抱っこしたことがありますか」と尋ねた項目への回答を表5に、「赤ちゃんに関わったり、遊んだりした経験はありますか」と尋ねた項目への回答を表6に示す。

A大学の合計とB大学の合計とについてのMann-WhitneyのU検定では、赤ちゃんとの接触経験を尋ねる3項目とも差は極めて高度に有意であった ($p=.000$)。A大学の方がB大学よりも、接触経験が多いと感じている者が多いこ

表4. 赤ちゃんをさわった経験

	知識	よくあった	ときどき	なかった
A大学	有り	28.3%	62.3%	9.4%
	無し	21.4%	68.6%	10.0%
	合計	27.1%	63.3%	9.5%
B大学	有り	15.5%	73.8%	10.7%
	無し	6.1%	69.7%	24.2%
	合計	13.9%	73.1%	12.9%

表5. 赤ちゃんを抱っこした経験

	知識	よくあった	ときどき	なかった
A大学	有り	25.7%	60.0%	14.3%
	無し	18.6%	65.7%	15.7%
	合計	24.5%	61.0%	14.5%
B大学	有り	12.5%	65.5%	22.0%
	無し	6.1%	48.5%	45.5%
	合計	11.4%	62.7%	25.9%

表6. 赤ちゃんに関わったり遊んだりした経験

	知識	よくあった	ときどき	なかった
A大学	有り	27.1%	56.9%	16.0%
	無し	24.3%	61.4%	14.3%
	合計	26.7%	57.6%	15.7%
B大学	有り	11.3%	66.1%	22.6%
	無し	3.0%	54.5%	42.4%
	合計	10.0%	64.2%	25.9%

とが分かる。

基礎知識の有無の違いでは、両大学共に基礎知識が有りの者が無い者に対して、赤ちゃんとの接触経験を尋ねる3項目とも、より多く経験をしていた。接触体験に基づいた基礎知識であることが理解できる。

しかしながら、B大学の基礎知識有りの者でも、A大学の基礎知識無しの者よりも、赤ちゃんとの接触経験が乏しいと感じている傾向が示された。

また、B大学の基礎知識無しの者は、赤ちゃんとの接触経験が極端に乏しいと感じている傾向が認められた。

(2) 赤ちゃんの育児経験

赤ちゃんの育児経験を尋ねる質問項目として、「赤ちゃんにミルクを飲ませたり、食べさせたりしたことがありますか」と尋ねた項目への回答を表7に、「赤ちゃんのオムツを替えたことがありますか」と尋ねた項目への回答を表8に示す。

A大学の合計とB大学の合計とについてのMann-WhitneyのU検定では、「ミルクを飲ませたり食べさせたり」では差は有意であり ($p=.015$)、「オムツ替え」では差は高度に有意であった ($p=.002$)。A大学の方がB大学よりも、育児経験が多かったと感じている者が多いことが理解できる。A大学では基礎知識が有る者の方が無い者より育児経験の経験値が高かった。これに対して、B大学では「ミルクを飲ませたり食べさせたり」では、基礎知識が無い者の方

表7. 赤ちゃんにミルクを飲ませたり食べさせたりした経験

	知識	よくあった	ときどき	なかった
A大学	有り	14.0%	31.1%	54.9%
	無し	5.7%	18.6%	75.7%
	合計	12.6%	29.0%	58.3%
B大学	有り	2.4%	32.7%	64.9%
	無し	6.1%	24.2%	69.7%
	合計	3.0%	31.3%	65.7%

表8. 赤ちゃんのオムツを替えた経験

	知識	よくあった	ときどき	なかった
A大学	有り	17.1%	39.4%	43.4%
	無し	8.6%	32.9%	58.6%
	合計	15.7%	38.3%	46.0%
B大学	有り	6.0%	39.9%	54.2%
	無し	6.1%	27.3%	66.7%
	合計	6.0%	37.8%	56.2%

が有る者よりも、「よくあった」と回答した者が2.5倍も多く、逆転現象が発生していた。また、「オムツ替え」でもB大学では、「よくあった」と回答した者が、基礎知識が無い者の方が有る者よりも0.1%ではあるが多かった。

両大学、基礎知識の有無に関係なく、赤ちゃんとの接触経験よりも、赤ちゃんの育児経験がより不足しており、これは原田の調査結果とも共通した課題であることが理解できる。

4. 考察

(1) 調査結果から見えてくる保育者養成の課題

本調査の対象は、保育者養成課程に所属しており、子どもへの興味・関心は一般の大学生よりも高いと推測される。それにもかかわらず、赤ちゃんの育児経験が不足しているという実状からは、相当に意識して赤ちゃん与学生とが関わる機会を設ける必要に迫られていることが理解できる。

一方で、如何に現代社会における子どもや育

児中の養育者への理解が高まらないかということの一因を表しているとも考えられる。

実際、幼稚園教育実習や保育実習の事前指導などにおいても、子どもと関わった経験が少ないことから不安を感じるという内容が学生から語られることが少なくない。

一方、現代の育児環境を受けて、最前線で親子に関わる幼稚園教諭・保育士などの保育者には、さらなる力量が求められている。文部科学省(2018)や厚生労働省(2018)によるECECの新たな指針からは、子ども・子育て支援に関する理論や実践について、心理学的な側面からも学ぶ必要性が高いことが理解できる。通常の幼児教育・乳幼児保育に加えて、親子支援の観点を持ち、これまでの知見を応用し、多職種との協働による支援実践が行える保育者が求められているのである。

一方、親子支援は、既存の学問領域を越えた比較的新しい枠組みであり、多職種・多領域間の協働や、既存の専門性の応用を必要とする活動である。ECECは、今、まさに、大きな転換期に直面しているのである。

(2) 調査結果に基づいた子ども・子育て支援の展開

現在、筆者が所属する児童学科においては、京都市学まち連携補助事業や学内のFD活動予算、教育機器備品費、教育活動予算などの助成を受けて、2016年度から多岐にわたる親子支援活動を講義内外において開始、展開している(瀬々倉, 2018)。以下に、今後の大学の保育者養成課程における親子支援活動の参考となり得るよう、時系列的にその試行錯誤の過程の概略を瀬々倉(2018)より再掲する。

ワーキング・グループの立ち上げ

まずは、学科内の4領域(後述)から代表者を選び、子ども・子育て(のちに「びっばらん」)ワーキング・グループを立ち上げて頻繁に相談・検討を重ね、定期的に学科会議でも審議してきた。

2017年度には、学内外の多くの方々の協力の

もと、実際の親子支援プログラムを考案し、以下の2形態を実施している。①親子分離によるクローズド・グループの連続講座で、後に「ぴっばらんシリーズ」と名づけた活動、②後に、「ぴっばらんど」と名づけた「こども広場」における子育て支援ルームの開放である。

いずれも大変好評で、今後の継続を強く望む声が寄せられた。児童発達学・表現学・文化学・保健学という多様な専門領域の教職員や学生から成る児童学科ならではの親子支援が、現在展開されつつある。この活動自体が、本調査結果などの学問的な裏付けによって展開されているものであり、地域子育て支援実践活動と、子ども・子育て支援の出来る保育者養成とは並行して行わなければ成立しないことは、言うまでもない。別の観点からいえば、アクティブ・ラーニングの最たるものである。

活動開始準備：2016年度

活動を開始するにあたって、以下のコンセプトをもとに準備を進めた。

- ①未就園児とその保護者とを対象の中心にする。
- ②家庭ではなかなか経験できない豊かな遊び体験を提供する。
- ③子どものみならず、保護者にとっても意味のある体験を提供する。
- ④豊かな親子関係をつむぐことに貢献する。

以下は上記のコンセプトにもとづいて揃えられた良質な玩具などの概要である。これらは、多様な専門領域で構成されている児童学科の教員をはじめとした著者らによって選択された。

未だ十分に定量化されていない子ども・子育て支援活動については、学生たち自身が卒業直後から、その活動の環境構成や企画、実施などを担っていく可



図1. 木の玩具選び

能性が高い。そのため、家具や玩具類の選定理由やそれぞれの機能などを講義内外において十分に説明している。

加えて、用意された玩具類に学生たち自身が慣れ親しみ、楽しさや面白さを理解して初めて、子どもたちに効果的に遊びを提供することが可能となるため、子ども・子育て支援活動の一環として、状況の許す限り、子育て支援ルームに入り、玩具類で遊んでみるよう勧めている。

〈木製の家具と玩具〉

まず、木製のテーブルや椅子などをできるだけ幅広い年齢の子どもが利用できるよう、2歳児の体格に合わせてあつらえ、乳児には専用のフロアマットを用意した。次に、木製でCEマークを取得しており、食品衛生法に基づく検査をクリアしたものにこだわって、乳幼児の心身の発達を考慮し、玩具類を1つずつ丁寧に選んでいった。開室準備段階の2016年度には、学生と共に、木の玩具専門店に出向き、元幼稚園教諭であった店長に、一つずつ説明を受けながら玩具類を選定した(図1)。

具体的には、ラトル(ガラガラ)、積み木、おままごと道具、パズル、汽車とレール、引き車や手押し車などである。あわせて、学科内の倉庫から、クーゲルバーンや古い玩具類なども発掘している。

〈多様な玩具や材料〉

家庭では難しい感覚・感触遊びを経験できるように、蜜蝋のクレヨンや、口に入れても安全な指絵の具、洗い流せるクレパスやマジック、(あえて)ベタベタするのり、幼児用のはさみ(左利き用を含む)や様々な紙類を用意した。

また、人形劇を中心とする児童文化学の教員がパペットや指人形を、絵本学専門の教員が絵本を、乳幼児の音楽教育を専門とする教員が素朴な楽器の数々を用意した。

さらに、設定によって移動できる身体運動遊び用の大型遊具なども設置した。

なお、絵本については、大切に使うために、1冊、1冊フィルム・カバーをかけている。著者の大江が1度学生に教え、その後は学生たち

で教え合っている。

〈衛生面の配慮〉

上述した乳児専用のフロアマットには、使用の度に洗濯できる布カバーを用意した。また、眠ってしまった子どものためにタオルケット類にもこだわり、スイスの認証機関である bio.inspecta (バイオインスペクタ) が認めたオーガニックコットン使用の物を選んだ。さらに、子ども用のトイレについて、靴から履き替えられるよう親子用のスリッパを用意した。

親子支援に関わる環境整備と支援の開始：2017年度：キャンパスの親子支援に関する環境アセスメント

3, 4 回生の複数の講義において、沐浴やオムツ替え実習で使用されてきた乳幼児人形 (実物大) を抱っこひもなどを使用して抱き、学内でロール・プレイングを行った (図 2)。



図 2. 学内を赤ちゃん人形と歩く

抱っこひもを用いて赤ちゃん人形を抱いたり、幼児になりきったりするロールプレイングによってキャンパス内を歩き、どのようなところに危険性があるのか、どのようなところに案内表示があれば安心できるかなど、親子支援環境のアセスメントを実施した (図 2・3)。この親子支援に関する環境アセスメント活動には、2016-2017年度だけでも、実に約130名にもものぼる学生が関わっている。

「京都女子大学親子支援ひろば ぴっぱらん」：ニックネーム・テーマ曲・手遊び歌・キャラクターの創作、壁面飾り・案内表示

空の棚と寄付されたピアノしかなかった殺風景な子育て支援ルーム (ぴっぱらんルーム) に



図 4. 空っぽの部屋からスタート

(図 4), 講義内外で 1 回生から 4 回生までの多くの学生が壁面飾りを作って装飾した (図 5)。



図 5 壁面飾り

幼い子どもと養育者に親しみを持ってもらいやすい活動や部屋のニックネームを学科全体で募集し、「京都女子大学親子支援ひろば『ぴっぱらん』」と名づけた。この名前は、本学の建学の精神を含むピッパラ樹 (菩提樹) からきている。また、子どもに馴染みやすい音とリズムを重視した。

さらに、見学に行ったピッパラ樹の葉から着想したキャラクターも創作した (図 6. 前川, 2017)。

幼児の音楽教育を専門とするゼミ生は、オリジナルの [ぴっぱらん手遊び歌] を創作した他、乳幼児向けの手遊び歌を調べて動画で演じ、学生スタッフに提供した。

また、音楽の ICT 教育を専門とするゼミ生は、「ぴっぱらんテーマ曲」を作曲した (和田, 2017)。児童学科の全教員や学生らが自らの専門性を元に、乳幼児期の親子支援活動の実



図 6 ぴっぱらんキャラクター (前川, 2017)



図7. 幼児の抱き方のコツを学ぶ

践と、実践準備に携わった。

準備と並行して2017年度からは、保育者及び学生らとの協働によって、親子分離による「びっばらんシリーズ」及び「びっばらんど」の実践・研究を講義内外において展開している。

その過程においては、乳幼児との関わりが乏しい学生の教育に特に注視し、必要に応じて、幼児人形を使用して抱き方のコツを教えるなど、きめ細かな教育を行っている（図7）。

なお、国内の大学では、既に、心理学的な観点による複数の優れた養育者支援プログラムが、海外から日本にとり入れられている。例えば、愛着理論に基づいた「安心感の輪」プログラムや、「トリプルP」、「ノーバディーズ・パーフェクト」などである。これらのプログラムを取り入れている大学もある。

ところが、これらの「既存のプログラム利用型」とも言える「子育て支援」に注力したものは、筆者の知る限り、養育者に対してプログラムを実施している間、子どもは単に託児サービスを受けているか、誰かに預けられているに過ぎない。

また、多くの子育て支援機関で行われている「子育て支援」に注力したものは、必ずしも気乗りしない養育者に対しても、「子どものために」遊びを親子で行うという形式をとることが多い。

さらに、保育者養成課程においては、広場型に近い「出入り自由の遊び場提供型」として、多くの場合は、学生は主に親子を見守り、広く浅く関わる形式となっている。

一方、本学の児童学科で行っている親子分離を基本とした支援活動「びっばらんシリーズ」では、準備段階において、講義内外の相当な時

間を使用して学生を教育し、具体的な育児のコツを提供することにとどまらず、学生自らが気づいていく体験ができるようにファシリテートしていく。その過程を経て、実際の親子支援活動においては、養育者と分離した幼児と学生が1対1で関わっている。

また、養育者には、既に効果がある程度確認されている筆者考案の「らくがきゲーム（瀬々倉、2012・2013）など」を実施しており、従来の親子支援活動には無い、本学児童学科ならではの専門性に裏付けられ、深く親子に関わることのできるプログラム内容になっている（図8）。

2年連続して実施したこの活動は、地域親子支援活動としても、また、子どもに密に関わる経験が少ない学生を高い専門性をもった保育者に育てるためにも意味のある活動である。

さらに、2017年度に初めて「びっばらんシリーズ」において親子にかかわった3回生が4回生となり、下級生の活動に卒業研究としてかわりながら、改めて自らの体験を客観視する作業を続けている。

本調査の結果からも分かるように、現在、子ども・子育て支援の観点を持ち、支援実践を行える保育者の養成は急務である一方で、保育者養成課程においては、従来の実習に加えて実際の親子支援を学内外で実践しつつ、学生を教育するという、実践と教育を並行して行う必要が生じている。

充実した親子支援を行うためには、教育環境の充実化と保育者養成に関する深い理解、地域子ども・子育て支援と並行して行う必要のある支援者教育という新しい枠組に理解が求められる。

(3) 本研究の今後の展望

両大学を比較すると、出産に関する知識には差が無いにも関わらず、赤ちゃんとの接触経験、育児経験では共に有意差が確認された。大学によって経験の多少を感じる値に差があることについては、今後の研究課題としたい。

また、A大学では基礎知識が有る者の方が無

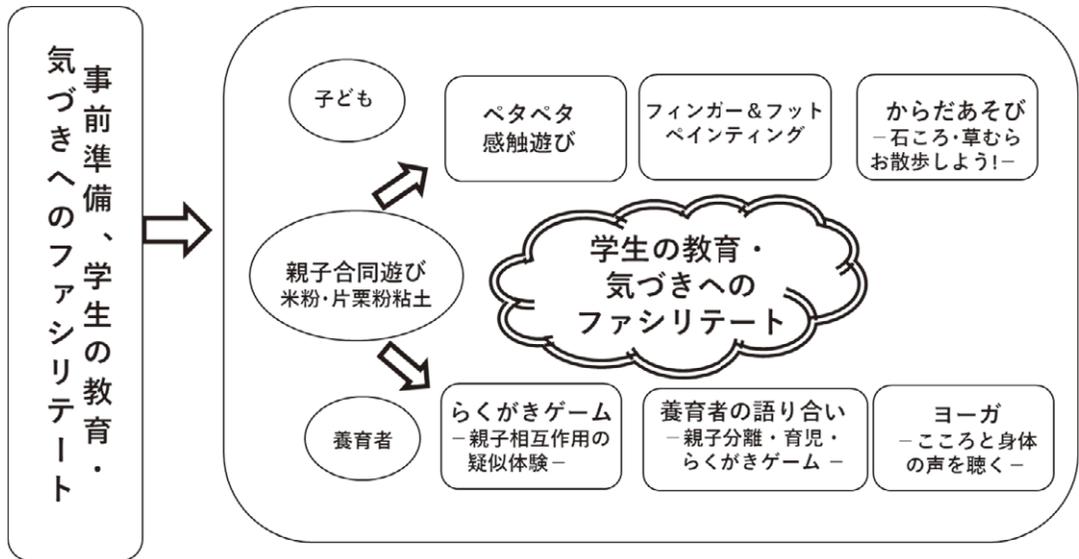


図8. 親子支援活動「ぴっばらんシリーズ」と並行して行う学生の教育（瀬々倉）

い者より接触経験、育児経験共に経験が多いと感じている者の割合が高かった。これに対して、B大学では基礎知識が有る者の方が無い者より接触経験が多いと感じている者の割合は高かったが、育児経験については一部、逆転現象が確認された。これについても、今後の研究課題としたい。

上述した子育て支援ルーム（通称：ぴっばらんルーム）の開室準備から3年が経過した。児童学科の学生や教員で精一杯の努力と工夫を重ねてきており、意味ある活動が展開されてきていると考えている。

しかしながら、保育者養成に求められている講義内容に応え、且つ、本学児童学科ならではの子ども・子育て支援を展開し、維持していくためには、この活動専従の保育者や事務職、専用の施設など基本的な整備が求められる。これらが整うことで、多様な専門性をもつ教員や学生が活動している意義が活きてくる。

なお、本調査においては、両大学の調査対象の年齢差や実習経験を考慮していないことから、両大学間の差に注目するよりも、むしろ現代の女子大学生の傾向をつかむことに貢献し得るといってよい。

付記

本稿における質問紙調査については、JSPS 科学研究費助成事業：基盤研究（C）（課題番号：5510023）の助成を受けて行ったものであり、日本乳幼児教育学会第26回大会において発表した（2016. 瀬々倉）内容に加筆修正している。

また、学生の教育及び気づきへのファシリテートは、筆者らの協働によって行った。

文献

- 原田正文（2006）子育ての変貌と次世代育成支援。名古屋大学出版会
- 金子隆一（2009）「ゼロから考える少子化対策PT」第1回会合 国立社会保障・人口問題研究所資料
- 厚生労働省（2018）保育所保育指針解説。フレール館
- 文部科学省（2018）幼稚園教育要領解説。フレール館
- 瀬々倉玉奈（2018）乳幼児期の子ども・子育て支援実践と支援者養成—京都女子大学 親子支援ひろばぴっばらん—。京都市「学まち連携大学」促進事業活動報告書2017。Pp. 17～19
- 瀬々倉玉奈（2016）赤ちゃんとの接触・育児経験に関する調査。日本乳幼児教育学会第26回大会研究発表論文集。Pp. 236～P237
- 瀬々倉玉奈（2015）子育て・子育て支援としての大学講義—赤ちゃんとの関わり体験調査—。大阪樟蔭女子大学研究紀要。第5巻。Pp. 117～125

- 瀬々倉玉奈 (2013) 子育て教室における養育者間
スクイグルと託児—親子分離の逆説的効果—
FOUR WINDS 乳幼児精神保健学会誌,
vol.6. Pp. 36~47
- 瀬々倉玉奈 (2012) 乳幼児期の子育て教室におけ
るスクイグル法応用の試み—親子の前言語・
非言語的コミュニケーションの疑似体験—
国際幼児教育研究. 国際乳幼児教育学会. 第
20号. Pp: 25~38
- 前川由梨奈 (2017) ぴっばらんキャラクター
上野千鶴子 (1991) ファミリーアイデンティ
ティーの行方. 上野他編. シリーズ変貌する
家族 I. 家族の社会史. 岩波書店. Pp.1 -
38
- 和田夏穂 (2017) テーマソングの制作～子育て支
援ルーム「ぴっばらん」～. 京都女子大学発
達教育学部児童学科 平成29年度卒業研究抄
録集 PP. 147-148

